



173号
2012/5/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli-san.com/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp
◆‘わんりい’HPのアドレスが上記になりました。



「黄土高原の子供達」(陝西省南原村にて) 2001年10月

撮影 木村武司

‘わんりい’ 173号の主な目次

北京雑感(64)住宅購入	2
私の調べた諺・慣用句「先んずれば人を制す」	3
媛媛讲故事(43)「寶娥の冤罪Ⅱ」	4
中国・城市めぐり(15)「瀋陽」そのⅠ	6
甘粕正彦と大杉栄	8
アフリカの日々(62)「小さな村の小さなカフェで」	10
ウィクスキマ(ケニア野菜)の花が咲いた	11
スリランカ紹介(57)ウミガメとフロアマット	12
読む(84)「この国のかたち 三」	14
松本杏花さんの俳句集「千里同風」より	14
私の四川省一人旅(55)草原の中の街・塔公V	15
‘わんりい’活動報告「スリランカ・カレーの会」	18
‘わんりい’活動報告「第8回漢詩の会」	19
‘わんりい’掲示板	19・20

【表紙写真説明】

延川の招待所から対岸の山を登った所にある南原村に向かう途中で、偶然にも出会った子供達である。

都会の子供と違って皆のほっぺが赤く、素朴な子供達の表情に思わず引かれ、撮影させてもらった。

スナップ写真が難しい中型カメラで、しかも三脚付きであったために撮影するまでに時間を要したが、その分子供達と話が出来たことによってカメラ慣れしていないこの子達の顔の緊張した表情が少しはほぐれ、撮影にとってはよかったと思った。

原画は元々は縦位置の写真ではあるが、表紙の関係で上下はカットして横位置としている。

(木村武司)

皆様ご存知の通り、北京の住宅やマンションの分譲は、建物の外側が出来上がった段階で売り渡されます。

一戸建て住宅など、階段は手すりもなく、裸のコンクリートの段々があるだけで、昇るのにも危なっかしい気がします。吹き抜けの居間などは、二階の床がスパツとなくなって、階下の床がそのまま目に飛び込んで来て、思わず腰が引けてしまいます。マンションの場合は、建物の外観や公共部分は綺麗に出来上がり、ドアもきちんと付いているのですが、そのドアを開けると、中はコンクリートの打ち放しで、電線や水道管が壁からよっつきりと出ていたりします。

このような状態で購入した買い主は、設計士に依頼し、相談しながら室内の設計をします。マンションでも構造上必要な壁面以外は撤去して、部屋を自由にレイアウトすることが出来ます。内装は、台所や浴室の設備は勿論、壁紙や床材、果てはドアまでも自分の好きな材料を選ぶことが出来るのですが、これが大変な作業なのです。

設計士は、材料などの相談にのってくれますが、業務として引き受けるのではなく、あくまでも相談相手で、選択と決定は建築主の責任で行います。それも見本帳などがあるわけではなく、直接「〇〇五金城」と銘打った市場に買いに行くのです。「五金」と言うのは、金物全般を言うのですが、「五金城」は金物の他に、セメントやタイル、ブロック等建築資材を扱っている、小さな小売店が沢山集まった市場で、北京市内にも幾つかあります。

市場の規模はとても大きくて、ちょうど築地の中卸市場でマグロ専門とか貝類専門とか扱う品目を限定しているお店があるように、床材専門、壁材専門、金物専門、配水管専門等に分かれていて、それが市場内に点在しているので、先ず適当な店舗を探すのが大変で、やっと見つけてもそこに気に入った品物がないと、他の同様なお店に行って探さなければなりません。私は一度、友人の家作りに付き合いましたが、「〇〇五金城」に何度も足を運んであれこれ吟味するのは楽しいけれど大変なことで、他人事ながら、いえ、他人事だからこそでしょうか、すっかり草臥れてしまいました。

実際に作業する職人さんは、住宅の分譲会社とか設計士さんとかに紹介してもらって依頼するのですが、日本だと大工の棟梁とか建築会社の社員が行う作業の取り纏めをする人がいないで、それぞれが施工主から仕事を請負っています。材料の購入は、職人さんが、「この部屋の床材は何平米分」、「浴室のタイルは何平

米分」などと計算して施工主に告げ、施工主が前述の「〇〇五金城」へ出かけて調達してくるのです。

余った材料は半端なもの以外返品が出来るので、少し多めに買います。作業の途中で思いがけず必要なものが出てきたり、連絡が悪くて必要なものが無かったりすると、職人さんから施工主に連絡が入り急いで調達に走ることもありました。作業が進むうちに、不足のものは職人さんに頼んで買って来て貰い、領収書で清算することが何度かありましたが、あくまでも施工主の現物支給が原則です。

職人さん同士の連携も余り良くないので、電気の配線工事が終わっていないのに、左官屋さんが仕事を始めたり、左官屋さんの仕事が終わっていないのに床張りの工事が始まったりとかなり混乱しました。時には、丸二日間作業が完全にストップしたりと、本当にいろいろなことがありました。それもこれも各職人さんが施工主と契約していて、職人さん同士の横のつながりが少ないのが原因でした。

この様子を見て、私は前にもお話ししましたが、このお部屋作りのコーディネーターをやったらビジネスとして成り立つのではないかと思いました。各部品・材料の見本帳を作り、施工主の要望を聞きながら材料を買い整え、日本の大工の棟梁に匹敵する職人さんの頭を養成して、工事全般を任せるとしたら、随分効率よく事が運び、施工主にも職人さんたちにも喜ばれると思いました。しかしこの方面の知識も経験も無いので、考えただけに終わりましたが、当時はかなり真剣に考えました。

中国式の住宅建設は施工主に大きな負担を強いるようで、ある知人は「家を建てるので5キロも痩せてしまった」と言っていましたし、別の人は「仕事が滞って困った」と言いました。中国で思い通りの家を建てるのは、資金ばかりでなく体力と時間も必要だとつくづく感じました。

しかし最近、マンション販売会社が内装まで済ませて売りに出す例が増えたようです。私の住んでいたマンションの最上階、所謂pentハウスは3階分を占有する大きな部屋でしたが、長い間買い手がつきませんでした。それが、ある時内装工事を始めたので、売れたのかと思い聞いてみると、マンションの所有会社が部屋を完成させて、賃貸住宅にするのだと分かりました。完成後暫くして、ある会社が福利厚生施設として借りたと聞きました。これからは北京でも、内装まで完成させた住宅が流通するようになるのでしょうか。

先んずれば人を制す

私の調べた諺・慣用句 9

三澤 統

例えば今、A社とB社が同じような新商品の開発競争をしていたとします。両社ともこれができれば必ず売上増につながると考えていて、しかもお互いに相手も同じような製品を開発中であることも知っているとしたします。

このような状況下でそれぞれの会社の社長が言うのは次のような台詞ではないでしょうか。

「何とか早く開発を完了して、わが社が先に打って出ようではないか。“先んずれば人を制する”だよ」

“先んずれば人を制する”はお互いがしのぎを削って競争している場面では、よく聞くことばですね。辞書では、

▲ 現代国語(三省堂):「先んずれば人を制す相手よりも先に事をおこ

なえば、有利な立場に立つことができる」

▲ 中日辞典(小学館):「先発制人(xiān fā zhì rén)先んずれば人を制す。機先を制する」と、それぞれ記されています。



この成語の由来は「漢書^注・項籍伝」の“先発制人、后发制于人”(先に行動を起こせば人を制し、行動が遅れば人の制することとなる)の部分です。

中国の古代、さしも権勢をふるった秦王朝も、始皇帝の没後二世皇帝の世となると、統治のほころびが見えはじめ、やがてそれまでの圧政に耐えかねた民衆の支持のもとに、各地で將軍たちが反乱を起こし、群雄割拠への世に移りつつありました。

折しも公元前209年、陳勝、呉広が大沢郷(安徽省)で秦の暴政に反抗して武装蜂起し、民衆の支持を得ることができました。

その頃、項梁は人を殺してしまったので、甥の項羽とともに、会稽郡の郡都である呉中(江蘇省呉県)に逃れていました。一方、会稽郡の郡守だった殷通は時勢に乗り遅れまいと、反乱を企てていました。殷通は項梁を大変尊敬していましたので、項梁を招いて当時の政治情勢や殷通自身のこれからの出方などについて相談をすることにしました。

殷通は項梁と会うと次のように現状を分析しました。「いまや江西(安徽、河南方面)の地域はみな既に武装蜂起をしている、これはもはや天が秦を滅ぼそうとしていることの表れではないかと思う。先に行動を起こせば人を制し、行動が遅れば即ち人の制するところとなる」と。

殷通は更に続けて言いました。

「ついでに貴方ともう一人の実力者の桓楚^{かんそ}と二人に挙兵の指揮を委任したいのですが、貴方は桓楚がいま何処に居るか知っていますか」

頼まれた項梁は困惑しました。それもそのはず実は、彼自身も、殷通を殺して挙兵をしようと思っていた矢先だったからです。そこで彼は考えた末に次のように言いました。

「実は桓楚は今、罪を犯して逃亡中で行方不明なのですが、私の甥の項羽なら彼の行方を知っているかも知れないので、彼をここへ呼んで訊いてみましょう」

項梁は部屋を出てゆくと、項羽に刀を準備させ、機会を見て殷通を切り殺してしまおうと打ち合わせました。

両人が部屋に入って来て、殷通が項羽と接見しようとした正にその時、殷通は項羽の剣でバツサリと頭を叩き切られてしまいました。項羽は殷通の頭を掲げ、群守の印章を携えて街に走り出して「殷通を打ち取ったぞ」と大声で叫びました。民衆はもともと秦朝の役人たちを心底憎んでいたもので、項梁が群守の殷通を殺したのを見ると、皆今度は項梁を群守として仰いだので、自ら会稽郡守となり、項羽が副将になりました。

その後項羽は、地元で“八千子弟兵”と呼ばれている、八千名の青年を取り込み、大変活気に充ちた戦闘力のある強力な部隊を組織し、秦王朝打倒に向けて挙兵しました。

〈注記〉

漢書(かんじょ): 中国後漢の章帝の時に班固、班昭らによって編纂された前漢のことを記した歴史書。二十四史の一つ。「本紀」12巻、「列伝」70巻、「表」8巻、「志」10巻の計100巻から成る紀伝体で、前漢の成立から王莽(おうもう)政権までについて書かれた。後漢書との対比から前漢書ともいう。

(ウィキペディアより)



イラスト: 叶霖(Ye Lin)

息子の方の無頼漢は薬を貰って家に帰る道すがらどうすれば薬を蔡婆に飲ませることが出来るかいろいろな策を考えてみました。実は、蔡婆は薬屋に危うく殺されかけ、無頼漢親子には脅迫され、嫁には咎められて、夜は寝られず食事も美味しく食べられない状態が続いて体調がすっかり崩れてしまっていました。

さて、無頼漢が薬屋から戻ってくると、家には寶娥と蔡婆だけがいました。彼は蔡婆の病床の前に来ると、親切ごかしに甘い言葉を掛けました。

「これはいけないね。取り合えずものをしっかり食べなくちゃあ。」

寶娥も続けて言いました。

「そう、そう、しっかり食べなきゃだめよ。何を食べたいの？ 寶娥が作ってあげから言ってみてね。」

蔡婆は

「それなら、羊肉が入ったスープを飲みたいの。作ってもらえるかしら？」

寶娥は、最近、姑にいろいろなことが起って可哀想に思っていたので、姑の言葉を聞くと快く応じました。寶娥は台所に入り、手早く調理すると間もなく香りのよい美味しいスープが出来上がりました。寶娥がそれを持って、蔡婆に飲ませようとする、無頼漢が横から手を出して、

「ちょっと待ちな。味がどうか俺が先ず飲んでみるよ。あれ、こりゃあ駄目だ。味が薄すぎるじゃないか？ 早く醤油を持って来なよ！」

といかにも本当らしく言いました。寶娥は仕方なく、姑のためだからと思って、台所に行きました。無頼漢はその隙に蔡婆に背を向け、素早く懐から薬屋を脅して調合させた薬を取り出して茶碗に入れてしまいました。そして台所から醤油を持ってきた寶娥が、茶碗にちょっとたらし、匙で姑に飲ませようすると、無頼漢は

「じゃあ、熱いうちに食べさせなよ。俺はちょっと便所に行って来るよ」

と言って、席を外してしまいました。

寶娥は茶碗を持ち、匙でスープを姑の口元に持って飲ませようとした時、蔡婆は突然咳込んで、スープを飲むどころではなくなりました。寶娥は茶碗をテーブルに置くと姑の胸を撫でてやったりしてました。この時、父親の方の無頼漢が帰ってきました。家に入るとスープの美味しそうな匂いに誘われて、

「何を食べているのかい？ おう、これは旨そうだ。丁度、腹が空いたところだ。俺が食べさせてもらおう」

と言いながら、お碗を手にとると、羊肉のスープをあつという間に全部飲んでしまいました。

寶娥は大変怒って、「それは、義母のために作ったのよ、あんたが飲んでしまうなんて許せないわ！」と言う間もなく、突然、無頼漢の顔色が変わって行き、お腹を抱えて苦しうなりながら倒れてしまいました。

寶娥も蔡婆も吃驚して言葉もありませんでした。

息子の方の無頼漢が丁度この時戻って来ました。胸の内で「ここの婆はもうスープを飲んだだろう。どれ、面白い芝居を見せて貰おう」等と考えながら、家に入って来てみると、なんと、蔡婆は依然とベットに坐っており、床には茶碗がこなごなに砕け散っているばかりか自分の父親が口から血を噴いて倒れているではありませんか。

三人は呆然としたまま言葉を発することなくお互いを見つめ合っていました。が、無頼漢の息子が真っ先に我に返り、口を切りました。

「寶娥！ この悪女め！俺の親父を毒殺しやがったな？なんてことをしやがったんだ!? 裁判所に行って酷い目に遭わせてやろう！」

寶娥は最初の内は突然のことに頭が真っ白

になっていましたが、だんだん何が起こったのか、何をすべきか分かるようになって、

「私は毒薬など持ってもいなかったのですから、これはあなた何かを謀ったに違いないでしょう？ 私を台所に行かせてる間に、あなたが毒薬を茶碗に入れたに違いありません。義母を毒殺したいと願っていたのはあなたです！」

と憤怒に顔を赤くして言いました。

無頼漢の息子は、自分が意図した事とは異なる、思いもよらない結果になってしまった事で怒りが収まらず、

「人を殺した犯人奴！役所に訴えて裁判に掛けて貰おう！お前など監獄に入れられてしまえ！」

と大声で叫びながら、寶娥を捉まえて玄関を出ようとしてました。

蔡婆は、気力を振り絞って、急いで玄関を閉めて言いました。

「静かしてちょうだい。お願い！お願いします!! どうしたらよいか良く相談しましょうよ」

無頼漢は、

「よし、寶娥が俺の嫁になってくれれば、親父を殺したことは誰にも明かさないうことしよう。それでどうだ？」

寶娥は固く頭を横に振りながら姑に言いました。

「お義母さん、それはいけません。私は人を毒殺していません！」

無頼漢は

「寶娥！馬鹿な女め！裁判に掛けられたら厳しい処罰が待っているぞ。拷問が怖くないのか？女のからだで耐えられるものか！」

「あなたが毒薬を入れたに違いない。私はやっていない。だから怖くはないわ！私は裁判が公正に行われると信じていますよ。さあ、役所に行きましょう！」

寶娥は自ら玄関を開けると外に出て役所に向かいました。無頼漢は仕方なく其の後に歩いて行きました。

しかし、裁判を担当する長官は、いつも裁判を利用しては私腹を肥やすような人間でした。寶娥と無頼漢が喧嘩をしながら入って来たのを見ると、私腹を肥やせる良い機会が又到来したと思いき嬉しくなりました。

長官は当事者の二人にいい加減な質問を二つ三つすると、寶娥に体刑を加えて無理やり白状を強いました。寶娥はその残虐な体刑に耐えられず何回も気を失ってしまいましたが、罪を頑として認めませんでした。

長官は「寶娥が認めないなら、蔡婆から訊こう！」と蔡婆を呼びました。しかし、蔡婆は無頼漢の死は、寶娥ではないと強く言い張り長官の思い通りの言葉を言わないので、「蔡婆も真実を話すまで拷問しろ！」と下役に命令しました。

寶娥は長官が下役に命ずる言葉を聞いて考えました。

「姑は歳をとっている。拷問には耐えられず死んでしまう。決してお義母さんを巻き添えにしない」

そこで、姑を救うため、仕方なく自分が毒薬を使って殺したことにして罪を認めました。

無頼漢と蔡婆はお金と引き換えに釈放されました。しかし、長官は寶娥が冤罪であることをよく分かっていました。心にやましいところがある長官は、寶娥を早く処刑してしまった方が良く考えて、翌日死刑を執行することを決めました。

(続く)

【‘わりりい’の原稿を募集しています】

‘わりりい’は、原則として、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と関係者の皆さんの原稿でまとめられています。中国で体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などを気楽にお寄せ下さい。

*紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたりすることもあります。

*‘わりりい’に掲載の記事などについても簡単なご感想をお寄せいただければ有難く存じます。

日中文化交流市民サークル‘わりりい’

大連から約400km離れた瀋陽には、特急で約4時間かかる。2008年7月に瀋陽に旅行したが、そのときのキップを記念にとっておいたのでそれを見ると、「新空調軟座特快」と印刷してあり、87元となっている。当時1元は15円位だったので、約1300円となるが、とても安い。空調付き特急の軟座、日本でいえばグリーン車になるのか。普通車の硬座に乗れば55元であるが、4時間も乗るのだから軟座に限る。中国の列車時刻表をみると、列車毎に空調があるか否かが表示されている。大連ではバスも普通1元だが空調付きの2元のバスも走っていた。空調は一つのレベルを示しているようだ。今どき列車くらいは長時間乗るのだからすべての列車に空調を付けるべきである。航空母艦まで建造し、不透明な軍事費の増大で周辺国はもとより国際社会に緊張を与えるくらいなら、民生に力を注ぐべきである。

この特急が駅を離れ、しばらくすると「ピンチリン、ピンチリン」という車内販売の声が近づいて来た。何元だったのか忘れたがアイスクリームは大好きなので1つ購入した。また、しばらくすると、別の車内販売がワゴンを押してきた。何を売っているのか見ると、「鶏のくんせい、ソーセージ、カップ麺、ひまわりのタネ、コーラ、スプライト、お菓子」等である。ちなみにピンチリンは中国語で「冰淇淋」と書く。ひまわりのタネは中国人はとても好きだ。お茶請けに、3時のおやつにいつもそばに置いている。口に入れたと思うと中の実を食べ外側のカラを器用に出す。私が1つ食べる間に5～6個は食べる。中国語の発音にも役立っているのかなと思ったりする。飲み物は、中国人はなぜかソフトドリンクではコーラとスプライトが好きだ。コーヒーや紅茶の文化が根づいていないこともあるがおいしい飲み物はいっぱいあるのに不思議で仕方ない。

特急は瀋陽に向かってひた走る。果てしなく続く畑を



十王亭

左右に見ながら、一路北に進む。国土の広さを実感する。こうした風景は日本ではせいぜい北海道で見られるくらいだ。4時間も車窓から農村風景を見てると流石に疲れる。有名な山とか湖もなくとにかく変化がない。ひとねむりした頃ようやく瀋陽駅に着いた。しかしこの駅では下車しない。この瀋陽駅は満州国時代の奉天駅である。駅舎は日本の辰野金吾という著名な建築家がよくデザインした「辰野金吾式」によるものである。中央には丸いドーム屋根があり、少し小ぶりだが東京駅に似ている。当時としては、ずいぶん立派な駅舎であった。現在はこの駅から5分くらいのところに新しい近代的な「瀋陽北駅」が出来ていて、ここがこの地方の交通の中心となっている。今は取り壊されたが、満州国時代の長春駅(わんりい 171号11ページに掲載)も写真でしか見たことがないが重厚で貫禄のある駅舎で、ここも少し離れたところに新長春駅を造ってくれていたら、と残念である。瀋陽には3～4回行ったが、よく瀋陽北駅前の「瀋陽郵政大廈」という、日本でいえば日本郵政が経営しているようなホテルに泊まった。

さて瀋陽は、長春市に次いで満州国時代の色彩の濃い街であるが、街自体の歴史は比べものにならない程瀋陽が長い。従って満州国時代の名残りもあれば清代の故宮をはじめとする旧跡もある。街の名前は他の都市に見られないくらい何度も変わってきている。古くは漢代には「侯城」という名称であり、以下次のような変遷がある。瀋州(唐代)→瀋陽(元代)→盛涼(明代)→奉天府(清代)→奉天(満州国時代)→瀋陽(現在)、と過去2000年の中で6回も変わっている。この瀋陽という名前の由来は、「瀋水」とも呼ばれた大河の北に位置していることから来ている。風水の考えでは、北側は「陽」、南側は「陰」



文遯閣(四庫全書が納められている)



大成殿

であることから瀋陽になった。人口は約700万人で遼寧省の省都である。旧満州地方でもある東北三省は、モンゴル族、満族、回族、朝鮮族、ロシア民族などが入り交じり多くの国が興亡を繰り返してきた。今は漢民族が一番多いようだが、これは近世になっての移住によるものである。この東北三省の中心がこの瀋陽である。

約270年にわたり清帝国を築いた満族(女真族)は、この地に彼らの都を造りあげた。1625年に太祖(初代)ヌルハチは、それまでの遼陽から瀋陽に遷都して世界遺産に登録された瀋陽故宮を建設した。1644年に明から清へと天下は移り、3代目の順治帝が北京の紫禁城に入城した。そして1912年、12代皇帝となった溥儀まで清帝国は続いたのである。その帝国が崩壊したときから今年ちょうど100年目にあたる。

なお、遼陽であるが瀋陽より少し南にあるこの都市は、日露戦争の時「遼陽の会戦」が行われたところである。続いて「奉天の会戦」があり何とか日本軍がロシアに勝利し、陸上における戦いは終止符を打ち、日本海での海上での戦いになっていく。

翌朝、まず故宮に行くことにし、タクシーに乗り込んだ。ほどなくタクシーは「懷遠門」の前に着いた。故宮の入り口までタクシーで行けるが、ここから歩いた方がいいと友人は言う。この門は城門である。中国は主要な都市には城壁が築かれ、城内で皇帝から庶民に至るまで一緒に暮らし、外敵から身を守った。日本はその点他民族の外敵から攻められるということもほとんどなかったため、城内には殿様とその一族や家来だけが住み、庶民は城外で生活した。中国は多民族国家の上、常に外敵の脅威にさらされていたので、そのような必要に迫られたのであろう。瀋陽もその昔城壁が築かれていたが、現在はほとんど取り壊され、この懷遠門など一部にしか残っていない。随分立派な城門で、周囲の高層ビルにも引けを取らないほどだ。この門を潜ってまっ直ぐ数百メートル歩いた先が故宮である。門から故宮までの両側は、造

りがいかにも中国風で、100年は経っていると思われる建物が連なっている。それらには、家具店、薬局、酒店、そして中華レストランなどが入っている。

雰囲気のあるこの通りをゆっくり散策すると、まもなく「瀋陽故宮博物院」の前に着いた。見るとワイン色の塀が続き、その向こうに濃い黄色の屋根瓦がのぞいている。やはり北京の故宮と比べるとずいぶん小さめではある。とはいえ6万m²の広さがある。北京の故宮は72万m²あるというから瀋陽の約12倍の広さである。入場券を買って中に入る。この敷地内には大小90の建物があると説明書にあるが、どの建物も色合い、屋根のソリ具合、壁のレンガ色などがよく似ている。北京故宮の建物ともやはり似ている。それらの中で一度見たら忘れられないくらい美しい建物が大成殿である。この建物は八角形をしていて二重の構造の屋根が乗っている。別名を八角殿と言うそうだ。ここは式典を挙げる場所で、例えば1636年には第2代皇帝のホンタイジ(皇太極)が大清国の建国の式典を行っている。大政殿を背にして前面の石畳の広い通りをはさんで5棟ずつ向かい合うように建っているのが十王亭だ。十王亭は1つ1つは方形をした小さな建物で、その中には清の軍隊である八旗のそれぞれの武器が展示してある。この一角は故宮の中で一番特徴があり美しいエリアといえよう。もう一つ有名な建物が「文溯閣」と呼ばれるもので、四庫全書が納められている、いわば図書館である。四庫全書とは6代目の皇帝である乾隆帝が編集させた中国最大の書物群である。何しろ7万9582巻もあるというからそのための建物も必要なわけである。

ここで少し横道に入りたい。——中国を旅すると、時おり古文書館とでも呼ぶべき建物に出会う。以前浙江省の寧波市に行ったとき、「天一閣」という中国最古の書籍が保管されているという建物に案内してもらった。あれだけ国内で戦乱が続き、近年は文化大革命があったのによく残っているものだと思う。やはり紙(後漢時代、蔡倫が蔡侯紙という紙を発明したとされるが、それ以前にも紙らしいものがあったとの記録がある)や、印刷技術も世界に先駆けて発明した国だけのことはある。印刷技術があれば、どこかで焼失しても、別のところで残っていくということではなかろうか。さらに中国の名誉のために付言すれば、他にも火薬や羅針盤も世界で初めて発明している。我々は欧米史観で歴史等を勉強してきた。白人が何でも最初に発明したり、発見したとのイメージを学校で植つけさせられたが、東洋文明はかなりのジャンルで西洋の遙か先を走っていたのである。東洋人はもっと自信を持ち、かつ東洋史観の世界史を世界にアピールしなければならぬと思う。閑話休題。

(次号に続く)

‘わんりい’172号をパラパラとめくってすぐ目に入ったのが、寺西俊英さんが書かれた「中国・城市めぐり〈长春市そのⅡ〉」だった。昨年9月、私も長春を訪ね、同じような場所を訪れたからである。中に入れなかったが、旧満映の「長春電影制片廠」の正面入口にも立った。しかし長春には何度か行ったが、残念ながら未だに旧満映の中を見たことがない。

それだけではなく、寺西さんの記事に目が留まったのは甘粕正彦と大杉栄の名前があり、懐かしい思い出が蘇った。

🚩大杉栄に魅かれた私

1960年代の半ばに大学のキャンパスを踏んだ私にとって、大杉栄はとりわけ魅惑的な響きを持っていた。当時は60年安保の熱気が冷め、68年の全共闘運動が盛り上がる前の、いわば谷間のような沈鬱な時代である。

それでもマルクス主義が幅をきかせていた時代だ。相変わらず、学生運動の主流は圧倒的にマルクス主義が思想的な支えになっていた。各派そろって5派8流なる政治諸党派が乱立する時代である。といっても多くの学生は、いわばノンポリ。「一般学生」は圧倒的に政治的には無関心層だった。

そんな少数の政治諸党派でさえ、マルクス・レーニン主義を奉じている。当然にも前衛党史観を抜け出せない。後生大事に組織重視である。どちらかといえば自由な雰囲気親しむ私は、そういう組織とは最終的には肌が合わず、アナーキズムに惹かれていた。時はちょうど、戦後初めて大杉栄の全集が出始めた頃だったと思う。

その前の高校時代から、今も存在するのかわからないが、日本アナキスト連盟の会合にも出ていたこともあった。大杉栄にはその奔放な行動力に魅了されただけでなく、自由恋愛主義なる「フリーラブ」思想にも魅かれていた。と言っても当時、恋人がいるわけではなく、まあ夢想の域をまるで出ない青年である。

大杉のことを調べていくと当然にも、甘粕正彦の名前が出てくる。大杉を殺した〈下手人〉としてだ。甘粕に対していいイメージなど持てるわけがない。

🚩多くの人々に慕われていた甘粕正彦

ところがそれから5年ほど経った頃だろうか。なんとか社会に出て禄を食んだ道は、週刊誌の記者だった。当時発行部数がトップを誇っていたサラリーマン向け週刊誌の雑多な取材に追われていた私

に、「あの甘粕正彦は本当のところ、大杉を殺していない」という話が飛び込んできた。これは面白い。事実なら衝撃的なスクープだ。特集記事になるのではないかと何人かと取材に当たった。

取材するうちに「甘粕会」という会があることがわかった。旧満州で甘粕正彦に接した人たちが、甘粕の人柄に惚れ込み、甘粕亡き後も甘粕を慕って仲間たちが集まっているというのだ。

その一人に今は亡き武藤富男氏がいた。当時、明治学院の院長ではなかったか。キリスト教新聞社の社長でもあったと思う。

武藤氏は、「甘粕は大杉を殺してはいない。殺すような人ではない」という。跳ね上がった軍人の一部が犯した罪を一身に背負い、甘粕が身代わりに出頭したというのだ。

調べてみると、それを匂わせる、ねず・まさし氏の現代史の研究書もあった。事

件はことによると、軍属だった秩父宮殿下にまで事が波及するとまずいという、軍上層部の意向で甘粕が罪を背負うようになったらしい。その研究書はそう書かれていたように思う。

しかし、取材しても「大杉殺し」ではないという決定的な証拠は出てこないの、この企画は没になってしまった。

40年ほど前の取材体験だが、今でもはっきりと脳裏に残っているのは、甘粕を知る人たちが、本当に甘粕に惚れこんでいるということだった。

🚩「書かれた歴史」は真実を表しているだろうか

その後、週刊誌記者をやめた後でも、甘粕と書かれた書物が出るとすぐ買い求めてしまう。角田房子氏の『甘粕大尉』（初版1975年）、近年では佐野眞一氏の『甘粕正彦 乱心の曠野』（初版2008年）である。この2つの著書を読めば、甘粕の「大杉殺し」下



手人説には疑問を持つだろうと思う。

今回この原稿を書くために、取材時に武藤富男氏から贈呈された『満洲国の断面』という著書を何年ぶりかで開いてみた。奥付を見ると、昭和31年9月10日となっている。昭和31年といえば1956年だ。「一九七一、七、二四、大類兄 武藤富男」と署名がある。発行されてから15年も経っている。武藤氏自身も、手元にもう何冊も持っていなかったのではないか。その貴重な1冊を贈呈してくれたのだ。中を開くと、もう字が薄れるほど古く茶色に染まっていた。取り出してみると表紙が剥がれてしまった。その表紙をよく見ると、小さく、「甘粕正彦の生涯」というサブタイトルがついている。当時、すでに絶版になっていたはずだ。もう「幻の書」かもしれない。何度か引っ越しや家の改築などで書棚にあった書籍はほとんど古本屋行きになったが、この書だけは手放さないできた。

『「人殺しが、満洲国の政治に関係するとは何と云ういやなことであろう」と私は思った』というのが本文の冒頭の文章である。当時、国務院法制処(法制局)の参事官をしていた武藤氏が、満洲帝国協和会の総務部長として甘粕が来るというニュースが入った時の感想である。その武藤氏は甘粕と接するうちに、「このような教養の高い人がそんな大それたことをしたのだろうか」と初めて、大杉事件について疑問を持つのだ。

「私の好きなのは悪源太義平です。彼は人のために尽くして損ばかりしている」「歴史の本に書いてあることはあてになりませんよ。歴史に記されたことと真相とは全くちがうことが、しばしばあるのです」。武藤氏の耳に残っている甘粕の言葉である。

武藤氏以外でも甘粕を慕う人たちは、「甘粕は大杉を殺すような人ではありません」と言って、その人柄を褒め称えるのだった。

角田房子著『甘粕大尉』によれば次のようなことが書かれている。

軍事法廷で甘粕の弁護人が甘粕に向かって、「あなた(甘粕)の母親がくあんなに子どもが好きな正彦が、子どもを殺すようなことはできません。正彦よ、どうか、このことだけは真実を言ってほしい」と訴えている」旨を話し、真実を述べるように促す。しかし甘粕は、すでに私は母を捨てていること、そして無意識に子供を殺したと述べる。この言葉を聞いて二人の弁護士は、「この法廷は陛下の名において行わ

る神聖なものだ。もう一度考えなさい」と迫った。

弁護士は甘粕に熟考の機会を与えるため、10分間の休憩を申請し、法廷はその要求を受け入れた。そして法廷は再開された。甘粕はしばらく沈黙の後、「・・・実際は私は子供を殺さんのであります。菰包みになったのを見て、初めて知ったのであります・・・」

こう言うと甘粕は、法廷にいる誰もの目が彼に注がれていることも忘れたかのように、顔を覆って泣いた。

甘粕はこの母親の気持ちを思い、大杉の甥の橘宗一という6歳になる少年だけは殺してはいないと、前言を翻したのだ。

✂ 墓場まで秘密を持って行った男

当時、やっと探し当てた甘粕の娘である甘粕和子さんにお会いしたが、彼女は私が記者であることを明かすと、一言も喋ろうとはしなかった。私はその気持ちが痛いようにわかり、黙って引き下がった。

甘粕はどこかで「本当は、俺は事件など起こしていないんだ、わかってくれよ」と誰かに言いたかったに違いない。普通の人間なら、どこかでそんな言葉を漏らすはずである。しかし決して口には出さなかった。だが、満映の理事長だった時代、酒席で酔いが回ると、あの教養があり紳士だった甘粕が突如、机をひっくり返すなど手におえないような行動をしたという事実は、なによりもその胸中の苦しさを表してはいないだろうか。

大杉栄はアナーキストとして、また自由恋愛主義者として、本当に好きなように生きた。その生き方は今、改めて知識人から脚光を浴びている。

片や甘粕正彦は、本当に言いたかった〈真実〉を一言も告げずに死んでいった。その人生を思うと、肅然とせざるを得ない。

(おおい・よしひろ：『日本と中国』編集長)

『日本と中国』は(社)日中友好協会が、編集・発行するしんぶんです。恐らく何らかのきっかけがあったのでしょうか。会報「わんりい」を『日本と中国』編集室にお送りしていました。この度、寺西俊英さんの「中国・都市(都市)めぐり/長春市」の内容が編集長である大類氏の目に留まり、当原稿を頂きました。文字通り市民サークル以外の何ものでない会の会報にお目通し頂いていたことを知り、尚原稿まで頂きましたことを深く感謝申し上げます。(田井)

小さな村の小さなカフェで

アフリカンコネクション 竹田悦子

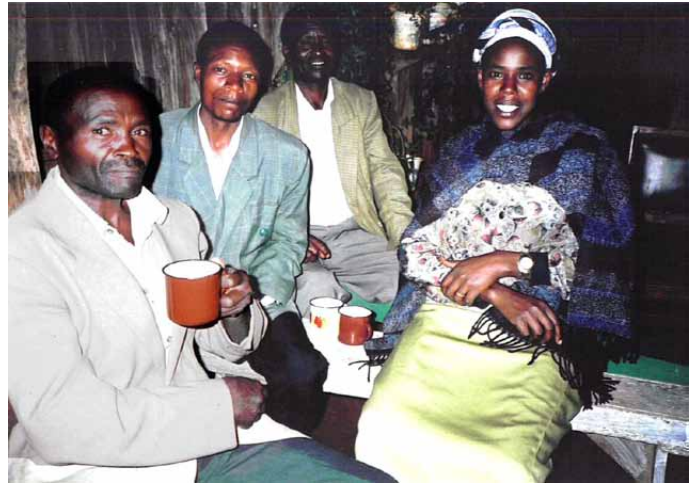
私がケニアに住んでいたとき、義父母が住むキクユ族のキアカンジャ村に帰るのは、農作業の手伝いをする為だった。その農作業の合間に訪れる場所があった。この村の街中にある1軒の小さなカフェだ。村人のみんなが、「家」と呼ぶ場所。看板もなし。営業時間も特に決まってない。そして、メニューは1つ、それは熱々のミルクティーだけ。訊かれるのはお砂糖を入れるかどうかだけ。

10年前に訪れた当時は、村にたった一軒だったそのカフェには、村中のいろいろな人が集まって来ていた。席は、10人座れば一杯になる部屋が2つ前後に並んでいて、それぞれの部屋は茶色のペンキで塗られ、茶色のテーブルと茶色のイスという統一感のある色彩が自分の家にいるような落ち着いた雰囲気を出していた。前方の部屋は1人客が多く出入りが激しい。奥の部屋は団体客が多く、長居する人達が多い。

私は、1人でふらりと入る。勝手に空いている席に座ると「SUKARI(シェカーリ)?」と訊かれる。「シュカリ」は、スワヒリ語で砂糖を意味するが、キクユ語が主に話されているここでは、「シュカーリ」と語尾にアクセントが付いている。この店ではスワヒリ語と同じ言葉でも、発音はキクユ風と言う言葉も多い。「砂糖」もその1つだ。いろいろな部族が入り混じる首都ナイロビと違う。それだけで私は、「ああ、今キクユ族の村にいるんだな」と感じる。

砂糖は、村人にとっては贅沢な品である。なのでほとんどの人は、砂糖を沢山入れてもらっている。私も沢山入れてくれるように頼む。まもなくガラスのコップと熱々紅茶の入った大きなヤカンが出てくる。ホーローやプラスチックのコップが主流のケニアで、この店は耐熱のガラスが出されるという滅多にないとても珍しい店だ。ストーブの火で熱せられていたヤカンに入ったあつあつの紅茶を、高い位置から一直線に一気にコップに注いでくれる。そうすると少し飲みやすい温度になってくれる。

飲み始めるや否や、私が座っているところへ人がどんどん移動して来て、席を詰め合ったり、替えたり、イス取りゲームのような感じになる。初めましてと挨拶を交わす人や良く知り合ったなじみの人、家族、近所の人、学校の先生、牧師さんなどなど本当にいろいろな人が入れ代り立ち代わり、グラスを持って移動して来ては話し、



ケニアのお茶を飲む風景 ケニア / 中央ケニア州 / ニエリ県 / キアカンジャ村の実家にて (撮影 / 竹田悦子)

去っていくのだ。日本の喫茶店は、一度席に着いたらほとんどの人が動くことはないと思うがここはまさにメリーゴーランドだ。私が外国人で珍しいからではない。どんな人が入って来てもここではそうなのだ。

まさにここは、この村のみんなの「家」。家の延長であり、公共の家としての場所。入り口は玄関で、お店の中は居間だ。

私が1人で行くと、よく義父に会う。義父は寡黙な人なのだが、いつも沢山の友人に囲まれている。聞けば、彼は「村一番の聞き上手」だそうだ。おしゃべりな人が多いキクユ族だが、義父のような聞き上手はおしゃべりの相手として好まれるらしい。友人の話に笑顔でうなずく義父の顔が私は大好きだ。そして、いつも言う。「娘よ、こっちに来て座りなさい」と。一緒にグラスを並べて過ごす時間。そうやってここで村中の人をたくさん紹介してくれたのが義父だった。

来る人は変わっても、みんなのもう一つの「家」であり続けるだろう村のカフェで、私はいつも人のぬくもりを感じた。外国人とか、日本人とかは、何の意味があるのだろうかと思う。お互いがただの人と人同士だということを感じさせてくれるのがこの村のカフェにいる時間だった。

私がその店を訪ねていた頃から既に10年経った。現在では人口の増加に伴い、カフェの数も増えているらしい。そしてそれぞれの店の名前もちゃんとあり、看板も付けられて「家」ではなく「店」として営業している所が多いと聞く。でも私がいつも心に思うのは、あの場所でのあの時間だ。

我家の庭でケニアの青菜が花を咲かせた！

田井光枝

厳しい冬の寒さを乗り越えて今、我が家の庭に、ケニア野菜のスクマウィキ(ケール)が花を咲かせています。「滋養強精の青汁」のうたい文句で新聞に全面広告されている、あのケールの花です。'野菜なら花を咲かせるのは当然' と思いますよね。いえいえ、我が家の庭で花が咲くまでには、ちょっとした物語があるのです。

ケールの原産はヨーロッパのようですが、'わんりい'(2010年9月号)にアフリカンコネクションの竹田悦子さんが右コラムの文章を寄稿下さいました。

「一週間で何とか頑張って乗り越える」なんて言う名前が、ケニアの人達の貧しさを跳ね返すユーモアと'めげない精神'を感じさせて興味を覚えた。文章の中に“自宅の庭に植えてみた”とあったのと、私のようなずぼらな人間でも育てやすそうに思えたのとで、「私も育ててみたい」と竹田さんに伝えたところ、竹田さんが折り返し一包みの種を送ってくださった。

2010年の9月の半ば頃だった。長い間、草花の苗を買って植えるくらいしかしなかった庭いじりだが、折角の種だからと、気合を入れて、庭の日当たりのよさそうなところをタタミ一畳弱程掘り返し、培養土をすきこみ、わくわくと種を播いた。

一週間ほどして小さな芽が出揃い、「わあ！芽が出た!!」と竹田さんに感動の報告をした。ところがである。びっしり芽を出したもののそこでストップしていっこうに育たないのだ。早く育てとばかりせっせと水やりしたが芽を出したまま成長をストップしている。

そしてそれから半月ほどして気が付いた。何と同じ芽が庭一面に生えていた。雑草の芽だったのだ！

アフリカの植物なのだ。いくらタフな野菜でも適応期がある筈で寒さに向かうそんな季節に芽を出すのは厳しかったのかも。

そして昨年春、竹田さんから「4月が適期だそうですよ」と新しい種が送られてきた。今度こそはと、更に気



高さ1.3m近くまで伸びて、小ぶりの黄蝶のような菜花の花を咲かせている我が家のスクマウィキ

「Sukuma Wiki(スクマウィキ)な毎日」

アフリカンコネクション 竹田悦子

Sukuma Wiki「スクマウィキ」という名前の野菜がケニアにはある。

Sukuma(スクマ)というのはスワヒリ語の動詞で、「押す」「なんとか持ち越す」などの意味がある。Wiki(ウィキ)とは、英語のweek(週)からきており、Sukuma Wikiを意識すると「一週間でなんとか頑張って乗り越える」という意味の野菜である。どうしてこんな名前がついているのだろうか？とずっと不思議に思っていた。

今年の夏、ケニアから持ち帰ってきたスクマウィキの種を自宅の庭に蒔いてみた。そして自分で育ててみて、この野菜の名前の訳がなんとなく分かったような気がしている。

3ヶ月ほどで立派な葉が大きく成長し、食べられるようになった。一番大きな下の葉を採って食べても、次々に上の葉が広がってくる。小さなスペースで所狭しと植えても、すくすくと育ち、あっという間に収穫できるようになる。種は格安な上、少々水さえ与えれば育ち、どんどん収穫出来る。

ケニアにはトマト、キャベツ、じゃが芋、ニンジン、ほうれん草などがあるが、市場では少し高価だ。しかし、このスクマウィキはどこにいても見かけるありふれた野菜で非常に安い。ほうれん草のように束ねられた大束でも10円ほどだ。自分で育ててもいいし、市場で買っても安い。何とか次の週(ウィキ)を生き延びる(スクマ)ための野菜。……

ぎりぎりの食生活を支える「スクマウィキ」という野菜は、栄養も満点で、沢山の人の生活を経済的に支えている。…… Sukuma Wiki(来週も持ち越そう!)とはなんて面白い名前なんだろう。(2010年9月号)

合を入れ、苗用のポットをずらりと並べて種を播いた。今度は確かに芽は出た。ところが、芽が伸び始めて何日もたたない或る朝、全ての芽が全部消え失せていた。ナメクジ!? ヨトウムシ!? 或いは鳥?

そして3度目、残りの僅かな種から、ようようにして育った14、5本ばかりの苗を地面におろした。しかし、すくすくと育って「一週間で何とか頑張って乗り越え」させてくれる筈の植物は、我が家では育ちが悪く葉も伸びず、収穫には至らなかった。それでも、竹田さんがスクマウィキ(ケール)を食べてみましょう!と提案くださった会のメンバー達とケニア料理を作ったり、その後予定していた会の催しの'ブラジル料理の会'でも、ケールの炒め物が付け合せに添えられて、俄然、身近な野菜になった。

4度目の挑戦は種を採るしかない、竹田さんに伝えたらなんと「花が咲くんですか?」という意外な答えが返ってきた。「花、咲かないんですか」とおうむ返しに質問した。その後、ネットで調べても花が咲くとはどこにも書いてなかったし(今日もう一度調べたらいくつかケールの花の記事があったが)、増やすのは挿し木が良いなどと書いてあったりした。が、庭のスクマウィキはいじけたような姿ながら日照りが続いても枯れず、だからといって、年が暮れるまでに花は咲かなかった!しかし、ここまで来ると、最後まで見てやろうという気になるではないか。

そして、この寒い冬。寒さがいよいよ厳しくなってきたから、ひ弱でいじけた葉だった我家のケールは、不思議なことに、青々と葉を伸ばし、茎が太くなり、夏から秋に溜め込んだ力を発揮し始めたようだった。

年が明けて一月、二月は、当然ながら花が咲く気配

は全くなかった。が、元気に葉を伸ばしている姿に、収穫できそうな期待を持ちはじめ、植え替えの時期を待っていた。大雪の朝、一面の白い世界にみずみずしい緑色の葉は、鳥たちにとって格好のご馳走だったらしく葉の半分が鳥たちについばまれたりしたが、なんと3月のある日、葉の間に蕾を発見した。

その後、30cmにも満たなかった茎がグングン伸びて1.3m近くなり、小ぶりの黄蝶がとまっているような菜花が咲き始めた。寄り集まった蕾が一つ一つ下から上へと咲きのぼって行って、もうひと月近くなった。脇の方にも花芽をつけたので摘んで食べてみた。特に苦みもなく春の味を感じた。

最低気温が10℃を割らない地域の野菜が、今年のような厳しい冬を見事に乗り越え、花を咲かせている、その逞しさと健気さに今、私は毎朝、元気を貰っている。

ぼくが見て感じたスリランカ紹介 57

ウミガメとフロアマット

赤岡健一郎 (日本スリランカ武道協会
日本スリランカ文化交流協会)

御存じのようにスリランカは国土を海に囲まれています。このために国内各地の砂浜にウミガメが産卵しに上陸することが知られていました。

ウミガメは毎年ほぼ同じ場所に上陸するので、以前は地元の人に聞けば簡単に産卵を見学することが可能でした。最近では、近海の海洋汚染、スリランカや近隣国から流れ出したビンやプラスチック類、生活ゴミなどの漂流物、観光開発によって生じる騒音や人工光、観光客による産卵場所の踏み固めなどの影響で産卵地が減ってきたと言われていたところに、2004年12月のスマトラ沖大地震による大津波によって海岸へ流れ着いた漂着物の放置等で、海ガメの上陸地が更に減ってきているそうです。

僕が駐在しているころには無かったのですが、2000年代に入って何か所か産卵したてのウミガメの卵を移植し孵化させて、海に戻すプロジェクトが始められています。昨年見た「世界の車窓から」というTV番組の中でも南海岸のゴールロード沿い

にあるコスゴダのウミガメ保護プロジェクトが紹介されていました。僕も、2001年6月にスリランカを訪問した際に、コスゴダよりも少しコロンボ寄りの観光地であるベルワラの近郊にあるウミガメの保護施設を見学したことがあるので、今回はこの話をしましょう。

まずはウミガメの豆知識から始めましょう。僕は知りませんでした。調べてみたらカメは爬虫類カメ目に属していました。爬虫類というイメージが無かった

ので驚きましたね。世界中に約300種のカメがいる中でウミガメはアカウミガメなど8種類です。1種を除いて絶滅危惧種に挙げられています。スリランカ近海にはアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、ヒメウミガメ、オサウミガメの5種類が生息しています。

2001年のスリランカ訪問は、日本でも売れるスリランカ製品の発掘が主目的でした。ジャフナ旅行に一緒に行った友人のカルナラトネ君がガイド兼通訳で2週間ほどスリランカ各地を走り回りました。カルナラ



右手に持っている金属の棒でガンガン叩いて目を詰めて、形を整えていきます。

トネ君が以前勤めていたホテルのそばに、椰子の葉の繊維を使ってフロアマットを製造・販売している工場があるというのでベルワラに行きました。この工場から2、3分のところに、このウミガメ保護施設がありました。当時のスリランカには立派な施設で海岸線から数十メートル離れた場所に、フェンスに囲まれた敷地内に小さな事務棟と、砂浜を仕切って作られた孵化場、孵化した子ガメを育てる水槽等が設置されていました。

敷地内にいた初老の男性に、見学をさせて貰いたいと声をかけると、扉を開けて迎え入れ施設の説明をしてくれました。施設の運営はスリランカの自然保護NGOが行っているが、資金は主にヨーロッパの篤志家からの寄付で賄われている様です。

孵化させて海に放流するまで様々な苦労があるそうですが、此処で説明するのは省略します。ただ印象に残ったのは、魚や鳥などから捕食されない程度の大きさまで水槽で育てから放流するのは、ウミガメを守るためには必要なことだが、自然界で生き残るための術を獲得する機会を奪っているといった事です。

最近聞いた話では子ガメが親ガメになるまで生き残るのは1000匹の子ガメのうち1匹程度だそうです。僅かばかりの寄付金を渡して施設を離れました。尚、この施設は津波で施設が流されてしまいました。現在は再建されているそうです。

工場に戻って、今度は椰子の葉の繊維で作るフロアマットの製造工程の見学です。太目に紡いで様々な色に染められた繊維を金属の棒の間に絡めて、これまた金属の棒で叩いて目を詰めて形を整えていきます。ずいぶん乱暴な作業ですが、繊維を触らせてもらって納得しました。繊維は固くて、ゴワゴワしていて柔(やわ)に扱ったら形をつくれなんでしょう。最初に長方形の部分を作り、次に曲線部分を手作業で作ります。

町中のお土産屋で見ると、象の図柄の物が多いのですが、此処ではウミガメや魚の図柄のフロアマットも作っています。きっと隣のウミガメ保護施設と海岸を訪問した人がお土産にするのでしょうか。工場の人達はフロアマットとして作っているし、スリランカ人の家を訪れると玄関に置いて靴底の汚れ落としに使っているのを見かけます。

僕目から見ると、フロアマットとして売るのはもったいなさすぎます。壁に掛けるタピストリーや装飾品として売の方が高く売れると思うのですが、カルナラトネ君に聞いても、安価な椰子の葉の繊維な

んかで作った物は高く売れる訳がないと信じているようです。本当に欲の無い人達ですね。

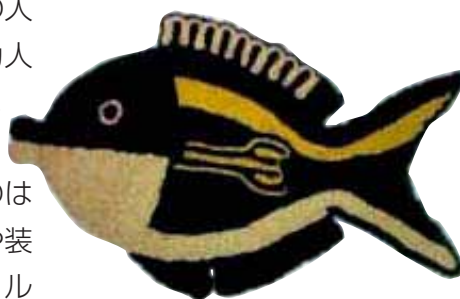
サンプルとして購入したフロアマットを持ち帰って、フリーマーケットで売ったら結構良い値段で即売でしたよ。



壁に完成したフロアマットが飾られています。手作業なのでそれぞれの色具合と大きさが違うのがよくわかります。右側のシャツの男性がカルナラトネ君です。左側奥に糸を絡ませる金属の棒が見られます。



反対側の壁に飾られているウミガメと魚のフロアマットです。ウミガメの目つきが怖いですね。



我が家に残しておいた魚の形のフロアマット。測ってみたら、口先から尻尾まで約90cmあった。

先日、明治神宮のなかにある清正の井戸を見てきた。パワースポットとしてご利益があると話題になったときは、長蛇の列だったが、最近はそこまでではないらしく、少し並びはしたが、すぐにその水に触れることができた。加藤清正は、以前、司馬遼太郎の小説で出会った。声の大きい、まっすぐな登場人物として記憶している。

加藤清正は関ヶ原合戦で徳川側についたものの、生涯、豊臣家への忠義を忘れなかったという。朝鮮へも出兵した経歴を持つ。ちなみにこの本で著者は、豊臣秀吉の朝鮮国出兵に対して、まったく理解できないとし、秀吉は天下統一をなすとげて、軽度のパラノイアに罹ったのではないかと仮定する。

また、徳川家康の言葉を引用し、当時の人々も、まったく理解できなかつたと説明。「晩年の秀吉の“病気”による禍害は、当時だけでなく、こんにちまで隣邦のうらみとしてつづいているのである。やりきれない

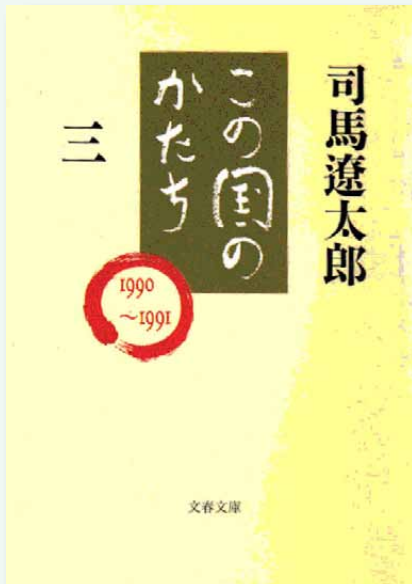
思いがする」と結ぶ。

別の章では、この出兵により、人々は豊臣政権に厭き、徳川家康の安定感を求めたとしている。その世間の気分により、徳川家康は「関ヶ原合戦をへて天下を継承した」。これを著者は「時の流れ」と表現している。

この「時の流れ」が歴史を左右する。そして、これを作り上げるのが、私たちひとりひとりだとすれば、歴史の大きな決定には、自分たちの責任が問われることになる。だからこそ、後世の人たちに対して、申し訳のない選択をしてはいけない。

これまで「知ることから始めよう」と書いてきた。けれど、今年の3月11日を経験し、防災に対して、

原発に対して、自分たちの意識がもう少し高かったならば、被害はもっと抑えられたのではないかと思えて辛い。「知らない」「関心がない」ということは、その時点ですでに罪なのかもしれない。(真中智子)



松本杏花さんの俳句

「千里同風」より

四阿へ菖蒲の色を運ぶ風

róu róu tángbiān fēng
柔柔塘边风

chuān guò chāngpú rǎn bì qīng
穿过菖蒲染碧青

chuī xiàng sìfāng tíng
吹向四方亭

季语：菖蒲，夏。

赏析：这首俳句地的高超之处，在于同我国唐代诗人孟浩然的名句“荷风送香气，竹露醒清响”又异曲同工之妙。一个是风送香气，嗅觉享受；一个是风染亭树，视觉享受，可谓俳句咏物上乘之作！

雨粒の綺羅を宿せる青葉かな

jīngyíng yuán yǔ zhū
晶莹圆雨珠

cù cù qīng yè xiāng liú sù
翠翠青叶相留宿

huá yàn yù lì fú
华艳玉粒浮

季语：青叶，夏。

赏析：杜甫诗云：“小雨晨光内，初来叶上闻。”而松本女士描写的是露宿在青叶上的雨珠，也不知作者是赞叹绿叶的青翠呢，还是颂咏浮在青叶上的雨珠晶莹？不管答案是什么，我们都尽享其美，都为这描写细腻的佳俳句而叫好！



僧侶の部屋は、本堂から境内を斜めに横切った場所に建てられた日当たりの良い二階にあり、窓からは参拝者の行きかう境内を眺め下ろすことができた。

壁の一面に床から天井までの大きな神棚が設えられた部屋の片隅には、小さなテーブルとソファがあり、私が勧められてソファに腰掛けると、僧侶が沢山のアルバムと写真の束を取り出してきて一枚一枚説明しながら見せてくれた。写真の中には、この部屋で写された様々な国籍の老若男女が僧侶と並んで笑顔を見せているスナップが何枚もあり、これまでも大勢の人達が僧侶に招かれてこの部屋を訪れているらしい。

きっとこのお坊さんは人とふれ合い話す事が好きなのだろう。突然部屋に遊びに来ないかなどと誘われ少し戸惑いを感じていたが、それまでかすかに抱いていたこの僧侶への警戒心が緩んでいった。部屋を訪れた来客者達のスナップの他にも、お寺の行事や僧侶が旅行で訪れた旅先での写真が沢山あり、そんな写真を一枚ずつ解説をしてくれる僧侶の楽しげな様子に、お坊さんの生活も結構楽しい事もあるものなんだな～、と意外な事実を知った気分だ。

幼い頃より仏門に入りずっと寺で暮らしてきたという僧侶の話に、私は稻城からの帰りに立ち寄った寺で出会った、少年僧の事がしきりに思い出されていた。まだ13歳だという少年が家族と別れ、世俗と切り離された山寺で一生生きていくのだと聞いた時には、いくら仏の道に仕えるのだとはいえ、こんな少年が生涯閉ざされた世界に缶詰になったような暮らしを余儀なくされるのかと胸が痛む思いをしたが、この僧侶の話聞き写真を見れば、お寺で僧として暮らして行く事は、それほど閉ざされた世界に暮らす訳ではないのかもしれない。

写真の中には中国国内のみならず、海外で写されていた写真もあった。この辺りの村に農民の子として生まれた人間で、一生の間に海外旅行が出来るものが何人いるのだろう。それを思うと、学問を学んで立派な僧となれば人々の尊敬も得られ、このように広い世界への見識も深めるチャンスも得られる事は、逆に恵まれているのかもしれない。

あの日、くったくのない笑顔を浮かべていた少年僧のおかれた境遇に、暗澹とした思いが感じられていた

私だったが、そんな彼の未来に光が差したような気がして、少し気持ちが明るくなった。

しばらく写真を見せてもらいながら談笑していたが、そろそろお寺で行われるらしい謎の行事が始まる時間となっていた。それを僧侶に告げると、

「ああ！そうそう。面白いから見に行っておいで。それが終わったらまたここに遊びにくるといいよ」

と送り出してくれた。

え？また？

僧侶も話し相手が居なくて暇なんだろうか？

首を傾げながら再び境内を横切って本堂に向うと、先ほどまではガランとしていた堂内には20代から30代とみられるような歳若い僧が大勢集結していた。若い僧侶達は本堂の中心で向かい合わせに列になって座り、周りは1階も2階も見物客でいっぱいだ。

私は本堂の上をぐるりと囲む回廊となった2階に登り、テラスの上から1階の僧侶達がこれから何を始めるのか、ワクワクしながら覗き込んだ。

程なくして、二人ずつ組になった僧侶のひとりが何事か声を上げると、対峙する僧侶が何かを叫び返しながら、両手を前につきだし手のひらを打ち合わせる様子が見られた。向かい合って叫びあう僧侶の中には、何か面白い言葉を言っているものも居るようで、見物客からは時折笑い声がこぼれるが、言葉の理解できない私には、何がなんだかさっぱり解らない。

いったいこの青年僧達は何をやってるんだろう？

結局この時には、この行事に何の意味があるのか、僧侶達が何を言い合っていたのか、私には全く解らないままに終わってしまったが、日本に戻ってから調べたところ、それはチベット仏教特有の禪問答であるのだそうだ。

チベット仏教では、論理的な哲学的思考が重要視されており、日頃から学問を積み思想を深めた僧侶達は、日常的に自身の哲学を持って対峙する僧との問答修行を重ね、自身の仏教哲学を磨くことに切磋琢磨しているのだという。この問答で論理的に矛盾した答えをしたり、言葉に詰まってしまえば負けとなるのだそうで、例えば、まず始めに「仏とは人であろうか」と問うと、

答え手は「そうである」とか「そうでない」とか答える。もしそうだとすれば一歩を進めて、「では私は生死を免れまい」「私は生死を免れた」「いや、私は生死を免れぬ。何故なら私は人である。人が生死を免れぬように、仏も生死を免れまい」

このようにたたみかけて問い詰める。

そこで答え手がやり手であると、「私は人でありながら生死を免れた。仏の生死は仮に生死を示現したものである」などと言って、仏に法身、報身、化身の三種があることを解するようになり、また、もし人でないと答えると、「いや、インドのシャカムニ仏は確かに人であった。これはどういうことか」と言うように、どこまでもなじってゆく。どっちに答えても詰まるようにどんどん問答を進めるので、その問い方と答え方に僧の知力が問われる為、この禅問答は僧の出世試験の為にも用いられているのだそうだ。

手を打ち鳴らして叫びあう僧達の姿が、そんな意味の込められた問答であったとは露知らず、2時間も前から寺に待機して楽しみにしていた催しが全く訳が判らないものであった事に、私はやや不満だった。

言葉が解る人間にとっては、丁々発止と活発に取り交わされる僧侶のやり取りは、興味深く面白いものであったであろうし、言葉が解らずとも、せめて何が行われているのか、その意味だけでも解っていれば、若い僧侶の知力をかけた精力的な言葉のやり取りを楽しんで見物できたのかもしれないが、その場の私の感想は、ただ「???・・・」であった。

なんだか肩透かしをくらった様な気分のまま、楽しみにしていたその日のイベントも終了してしまっただが、まだ日は高く、さてこれからどうしようかな・・・と本堂の外に出た私はちょっぴり迷っていた。先ほどの僧侶からは、禅問答が終わったらまた部屋に来るように



チベットの寺院で行われる、修行僧たちの禅問答の様子

と誘われてはいたが、曲りなりにも僧侶の部屋へ、女性が一人で遊びに行くなど変じゃないだろうか？

件の僧侶のあっけらかんとした態度には、後ろめたさなど全く感じられなかったが、誰かに見咎められて物議をかもしたりしないのだろうかなどと、こちらの方が心配してしまう。このチベット高原一帯でも、名高い寺の境内に自身の個室を持つ僧侶ならば、それなりの身分を持つ立場なのではと思われたが、行きずりの女性を部屋に招き入れるなど、そんな軽々しい振る舞いをするのが許されるのだろうか？

そんな事を思いながら所在無く寺の中庭に歩み出ると、部屋の窓から外を眺めていたらしい僧侶の方が私を見つけ、二階のまどから手を振りながら、部屋においでと声をかけられた。

先方から招かれれば特に断る理由も無く、私は再び僧侶の部屋を訪れた。ニコニコと笑顔を浮かべている僧侶の隣に、先ほどのソファに腰掛けると、問答は面白かったか？と尋ねられ、私はあいまいに頷いた。

自分が若かった時もずいぶんあれをやったもんだと僧侶は笑顔で思い出話をすると、ふと思いついたようにお腹が空いてないか？と私に尋ねた。もうお昼をまわっている時刻だ。この日の朝も私の定番食堂と決まってしまった麺屋でいつもの汁そばを食べただけの私は、今度は素直に大きく頷くと、僧侶はツアンパを食べてみるか？と私に聞いた。

ツアンパとはチベット民族が常食としているという「麦焦がし」のような食べ物だ。知識としては知っていたものの、それを口にした事は無かった。この旅を通して、チベット文化に大きく興味を惹かれていた私が、「食べたい、食べたい！」と身を乗り出すと、僧侶は嬉しそうにバターのような物を取り出し茶碗の中にひとかけら入れると、取り出してきた袋の中からきな粉のようにしか見えないツアンパをサラサラと注ぎ入れ、そこに少し水を注ぎ入れると、こうやって作るんだよと私に作り方を示しながら指で捏ね、適当な硬さにまとめて小さなラグビーボールのようなお団子にした。

僧侶が作るのを見よう見まねで私も自分のツアンパを捏ねてみたが、これが意外とコツが必要で、粉を撒き散らすばかりで上手くまとめられない。見かねた僧侶が、自分の手で捏ねても構わないのなら作ってあげようかと申し出てくれたので、ありがたくお願いした。

笑顔で私の為にツァンパを捏ねてくれている僧侶の隣に座っている内に、僧侶が小さな娘の為に食べ物を整える父親のように感じられ、温かいものが胸の中に満ちてきて、私はなんだかすっかり安心してしまった。

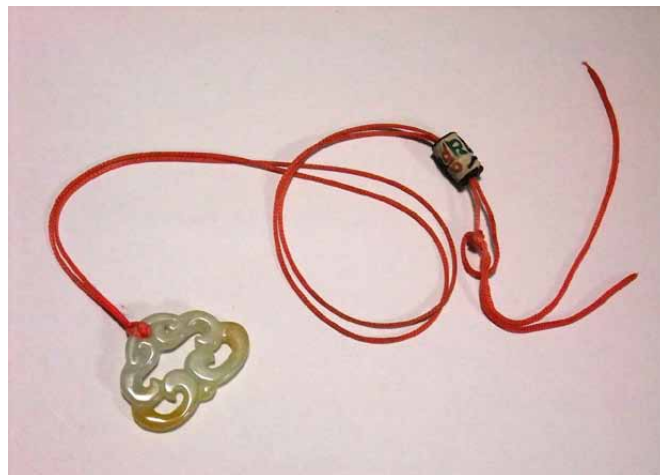
初めて食べるツァンパは見た目の通り、甘くないきな粉を捏ねたお団子の味そのものだ。お腹が空いていた私はそれなりに美味しく頂いたが、これを3度の食事として日常的に食すことを思うと、何とも味気ない気がした。下界の文化が流れ込み、町で暮らす人々の生活は様変わりしてきている事だろうが、本来厳しい自然環境の中で暮らしていたチベット族の人たちにとって、食事とは活動のエネルギーを得る為だけのもの、お祭りなどでご馳走を食べる日以外、日々の食の楽しみなどというものは、存在していなかったのではないだろうか。

簡単な昼食を終えた僧侶と私はソファーに並んで腰掛け、色々な話をした。僧侶の話は話題も多く会話も弾んで楽しかった。話している内に親しみの気持ちが増し、私が折り紙を取り出して花を折って見せると、喜んだ僧侶はそれを祭壇に備え、引き出しの中から紙に包んだペンダントヘッドのような物を大事そうに取り出すと、いくつかある中から一つを選び出し、お守りとしていつも身につけると良いと私に渡してくれた。それは薄い色のヒスイ(?)を削って作られた石のペンダントヘッドで、色々な形のものがあつたが、僧侶の言うことにはそれぞれ違った神様を表しているのだそう。

僧侶が私に選んでくれたのは、チベット語ではドルジャン、中国語では緑救度仏母と呼ばれる緑色の肌を持つ多羅菩薩を表すものだそうで、それは私がチベット仏教の神々の中で最も好きな神様だった。

このチベット高原を旅する間ずっと身近に感じられ、日増しに高まっていたチベットの神々への信仰心が、塔公を訪れて以来ますます強まっていた私に、この思い出深いラガン・ゴンパの僧より手ずから贈られた大好きな女神のお守りは、旅の記念としてもこの上なく、とても嬉しいものだった。

目を輝かせ、嬉しい、嬉しい!と素直に喜びを表す私に、僧侶は首からかけられるようにと赤い紐を取り出し、なにやらおまじないの言葉を唱えながらペンダントヘッドに通すと、輪にした紐を広げ私に頭を差し出すようにと告げた。僧侶と向かいあわせになった私に、ありがたい贈り物を押し頂く気持ちで神妙に頭を



塔公寺のお坊さんにもらったペンダント

たれると、首に神様のペンダントを掛けてくれていた僧侶の唇が、非常にさりげなく私のひたいに触れた。

は・・・!? こ、これは・・・?

それがあまりにさりげなく行われた為に、表面は平然と何も無かったかのように振る舞いながらも、内心では椅子から転げ落ちそうなほど驚愕していた私は、やはりそろそろおいとました方が良いでしょうと判断し、首にかけて貰ったお守りのペンダントに丁重にお礼の言葉を言いながら、もう帰りますというような言葉も重ねて素早く僧侶に告げた。私のいとまを告げる言葉に、まだいいのでは? もっとゆっくりしていけば・・・と、僧侶はちょっと残念そうな顔をしたものの、特に制することも無かった。

そうして、それまでと変わらぬ笑顔で私を部屋の戸口まで送ってくれた僧侶は、扉から出ようとする私を最後にちょっと引き止めると、自分に向き合うように立たせて目を瞑る様に告げた。私はあまり目は閉じたくなかったが、これまで優しくしてくれた僧侶の言葉に何となく逆らえず薄く目を閉じると、僧侶は両手を私の肩に添えて今後の旅の無事と私の未来に多幸が訪れるようにといった祈りの言葉を唱えてくれたのだが、次の瞬間、僧侶の乾いた唇が再び私のひたいに触れ、更に一瞬、私の唇に触れた。

ぎょええええええ～～～!!!!

ほうほうのていで部屋を飛び出した私は手で口をこすりながら、逃げ出すように寺を足早に後にすると、これまで神様の気配につつまれ、安らいでいたそれまでの信仰心を根底から覆されるような大惨事に動揺しながら、これでいいのか? チベット仏教は!?、と答えの返る事のない虚空にむかい、思わず何度も問いかけてしまう3日目の塔公の午後だった。(次号に続く)

スリランカのカレー(3種)の会 講師：サジニ(コロンボ出身)

日時:2012年3月22日(金)

場所:まちだ中央公民館・調理実習室

参加者:22名

スリランカについては、日本スリランカ武道協会代表の赤岡さんが長い間‘わんりい’紙上で紹介下さっていますので、スリランカ人気質など楽しんでお読みになっていらっしゃる方も多いでしょう。ご存じのようにスリランカはインド半島(大半をインドが占める)の先端のすぐ真下に位置する島国で、スリランカと国名を変える以前はセイロンと呼ばれ、最高品質の紅茶の産出国として知られていま



↑大皿の真ん中にご飯を乗せ、周りに出来上がった料理を盛り付けて混ぜながら食する

した。国名がスリランカになった今でもセイロン紅茶といえば美味しい紅茶の代表的なブランド名として認められています。

さて、インドの直ぐ真下にあるスリランカですが、スリランカのカレーはインドカレーとどこが違うのでしょうか？

4月13日(金)、上記会場で、ご夫君もスリランカ人で、日本に来て3年目という、どこか若妻の初々しい雰囲気のカジニさんを講師に、カジニさんの義父母も加わった22名が、スリランカの代表的なカレー3種(フィッシュカレー、ダル(豆)カレーとオクラのカレー)とスリランカ風サラダやデザートを作り味わいました。

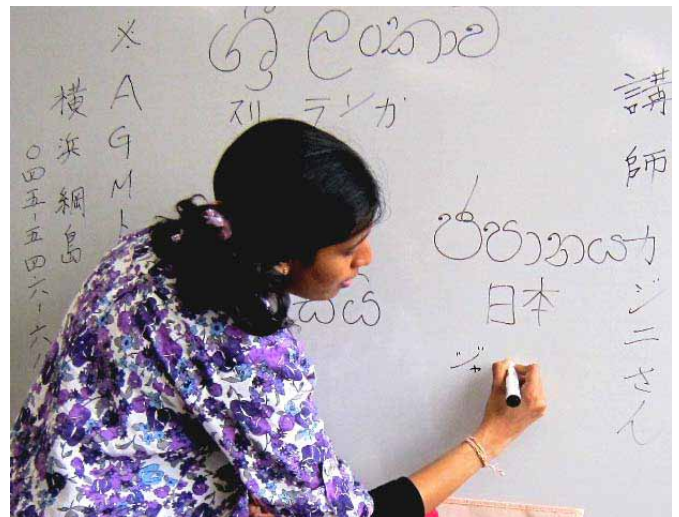
カレー料理はインドを起源として、その後各地に伝わってそれぞれの風土や嗜好に合わせたオリジナルのカレー料理になって行ったようですが、スリランカのカレーも周りを海に囲まれた島国らしく、少々突飛なようですが、日本でいえば鰹節を隠し味にしているのだそうです。油もあまり使わず、スパイス類が揃っていさえすれば時間もさほどかからず手軽にできる、さっぱり系の日本人好みの味でした。

民族料理の講習会は、現地から来た人に現地そのまま料理を紹介頂いて、一緒に作って食べてちょっぴりその国を知り、親しみ感じたりするいい機会になります。今回も、日本人の食生活では使用しないスパイス類を多用し、常夏の国の自然の豊かさを味わうと共に、お魚のカレーが日常的な家庭料理として作られることや味のベースに鰹節(モルディブフィッシュと呼ばれる)が色々な料理にごく自然に使用されることを知って、日本と同じ大海に浮かぶ島国としてのスリランカに親しみを覚えた事でした。

(報告：田井)



↑料理の盛り付けをするカジニさん



スリランカの文字と挨拶を紹介する

スリランカ・カレー料理の会から

特別なスパイスがなくとも簡単であつという間に出来る、栄養価の高いオクラのカレーです。

材料名	分量(8人分)	準備
オクラ	4パック	2～3mmの斜切り
玉ねぎ	中1個	3mm位の薄切り
トマト	大1個	3mm位の薄切り
青唐辛子	2本	小口切り
カレー粉	大匙1	
粉唐辛子	小匙2	
モルディブフィッシュ*)	大匙2	
ターメリック	1つまみ	
ニンニク	3片	すりおろす
生姜	親指大の1/2	すりおろす
サラダオイル	大匙2	
塩	少々	

*)材料中の「モルディブフィッシュ」は、鰹節を砕いたものです。

【作り方】

- ①. ボールに2～8の材料を入れ塩少々を加えて混ぜて置く
- ②. 油を熱し、ニンニクと生姜を炒め、そこに1を加えて弱火でしばらく炒める。
- ③. ②にオクラを加えて炒め合わせ味を調整して仕上げる。

◇わんりい活動報告

第8回「漢詩の会」

日時:2012年4月8日(日)

場所:まちだ中央公民館・6F 学習室3

講師:植田渥雄先生

桜美林大学孔子学院講師/現桜美林大学名誉教授

第8回「漢詩の会」では、前回用意した資料の中から、韓愈の「春雪」を中心にお話を伺いました。今年は春節がとても早く1月23日でした。太陰暦の春である春節が来ても、本当に動植物が春を感じるのは太陽暦二十四節季の一つである立春を過ぎてからなので、春節から立春までのこの季節、名のみ春をかこちつつ、立春を待つ気持ちが高まります。

韓愈のこの詩は、丁度今年のように、春節が非常に早く来て、立春までが長く、その間の春を待ち望む気持ちを詠ったものなので、植田先生が特に今年の春に取り上げようとして指定くださったものでした。身近な庭の情景に、春を待つ気持ちを託して、しかも漢詩作法上の規則にのっとった美しい詩です。

いつものように、音の高低を線で表し、ご指導に従って何回か朗読の練習をするうちに、いつもの自分の中国語とは違って、何やら中国語らしく聞こえるような気がして、嬉しくなって来ます。詩がぐっと身近に感じられ

るようになったところで、平仄の印をつけて確認すると、法則通りで改めて感心させられました。

次に、孟浩然の「春暁」をご指導いただきました。孟浩然是盛唐初頭の詩人で、普通「もうこうねん」と呼び習わしていますが、「もうこうぜん」と読むのが正しいと教えて頂きました。「春暁」は日本でも有名な春の詩で、しかも五言絶句ですから、暗唱するには手頃かなと思います。この詩の平仄は、普通の1句と4句、2句と3句が対になるのとは違って、1区と3句、2句と4句が対になっている変則的なもので、このように平仄のルールを少し変えた詩もあり、拗体（おうたい=ひねくれ体）と言うそうです。ちょっと親しみを感じるようになって来た平仄ですが、まだまだ奥は深そうです。

最後に、今回お話を伺った「春雪」、「春暁」のほかに、資料に載っている「江南の春」、「風橋夜泊」、「廬山の瀑布を望む」を一通り中国語で読んでいただき、詩吟とは違った、中国語独特の音とリズムを堪能しました。

次回は、5月20日(日)、14:00~15:30、まちだ中央公民館6F視聴覚室で開催します。5月は今までと違い午後の開始となりますのでご注意ください。内容は、前回、今回と使用した資料をもう一度使い、中国では「日本人が一番好きな詩」と認識されている、張継の「風橋夜泊」と、李白の「廬山の瀑布を望む」を取り上げていただく予定にしております。
(報告:有為楠)

《'わんりい' 掲示板》

◇わんりいの催し

第9回 中国語で読む・漢詩の会

▲日本でよく知られている漢詩を、中国語の音とリズムで楽しもう!

▲正しい発音で読めるように練習しよう!

✿ 第9回「漢詩の会」では、3月、4月に使用した資料から、中国で「日本人が一番好きな詩」として知られる張継の「風橋夜泊」と、李白の「廬山の瀑布を望む」を取り上げます。

✿ 漢詩は音楽です。「漢詩を中国語で聴き、中国語で朗読する」ことを目指します。中国語を勉強されていらっしゃる皆さんも、詩の背景や作者を知って、中国語による詩吟として楽しんで見るのは如何!? 皆様のご参加をお待ちしています。

■ 場所:まちだ中央公民館6F・視聴覚室
町田市原町田6-8-1

JR横浜線町田駅ルミネ口2分/小田急線南口5分

■ 月日:2012年5月20日(日)

■ 時間:14:00~15:30

◆ 5月講座の開始時間が変更になりました。間違えずにお出掛け下さい。

■ 会費:1500円 ■ 定員:20名

* 録音機をお持ちの方はご持参下さい。

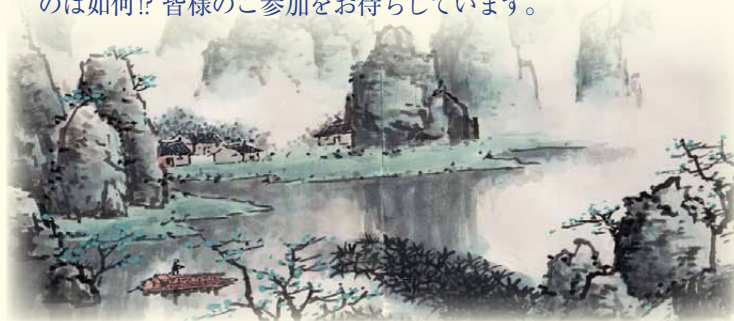
◆ お申込み: ☎ 050-1531-8622(わんりい)

E-mail: ukiuki65jpp@yahoo.co.jp

【植田渥雄先生略歴】

1937年、岡山市生まれ。東京大学文学部卒業。

- ▶ 元桜美林大学教授
- ▶ 元NHKラジオ中国語講座担当講師
- ▶ 現桜美林大学孔子学院講師
- ▶ 現桜美林大学名誉教授



2012 あさおサークル祭

2012年6月2日(土)～3日(日) 場所：麻生市民館 (小田急線・新百合ヶ丘駅・北口徒歩2分)

主催：麻生市民館サークル連絡会 共催：麻生区役所生涯学習支援課 / 麻生市民館

今年も、市民館の各部屋で毎年好評の楽しい催しが展開されています。下記は、迫力の和太鼓集団・夏菟太鼓、本格的フラメンコ舞踊など、大ホールと大会議室のスケジュールです。

月日	会場	時間	催物	参加サークル
6月2日(土)	大ホール	12:30～15:00	【シャンソン・カンツォーネ・コンサート】	サロン・ド・ショコラ
		16:00～18:00	フラメンコ!【Vivimos Sentimos!】	リリア フラメンカ
		19:00～20:45	【和太鼓をたたこう】19:00～19:30 体験コーナー 19:30～20:45 公開リハーサル	夏菟太鼓
	大会議室	11:00～12:00	【みんなで歌いましょう】	麻生童謡をうたう会
		13:00～14:00	【心に残る名曲を歌い継ぎたい】	麻生わらべ歌の会
		18:00～20:30	【裸婦デッサン会】 公開講座モデル2名参加費1000円 参加申込：佐藤988-7084	麻生区デッサン会
6月3日(日)	大ホール	11:00～13:30	民舞 着付けショー 新舞踊	踊ろう会・きものを美しく着る会
		14:00～15:30	夏菟太鼓演奏会～躍動・感謝～	夏菟太鼓
		16:00～17:00	日本舞踊発表会～浦島と龍宮城～	日本舞踊 七実会
		17:20～20:00	子どもたちの英語劇・世界の名作物語劇	ラボ・パーティ
	大会議室	9:30～14:00	室内模型飛行機と遊ぼう!材料費300円	Take-off
		15:00～17:00	朗読発表会	新ゆり朗読の会

‘わんりい’は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしく願います。尚、新年度の会費の納入は、出来るだけ4月一杯に願います。また、新入会を歓迎します。年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

‘わんりい’の活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。

入会されると

- ①年10回おたよりをお送りします。
- ②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

- ◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をpdfファイルでお送りします。こちらは無料です。
- ◆町田国際交流センターで、ご自由に取ることができます

[5月の定例会]

- ◆定例会：5月11日(金) 13:30～(田井宅)
- ◆おたより発送日：2012年5月31日(水)です。
～どちらも、お問合せの上ご自由に参加下さい～

日中友好40周年記念

林敏 揚琴リサイタル

シルクロードで生まれた中国古楽器《揚琴》。ギター、コントラバス、ピアノとの国境を越えたアンサンブル。

- 2012年5月18日 19:00開演(18:30開場)
- ミュージアム川崎シンフォニーホール・音楽工房市民交流室
- 3000円 全席自由
- 出演：林敏／揚琴
竹内永和／ギター
田中伸司／コントラバス
萩森英明／ピアノ
- 主催：林敏後援会
- 後援：「音楽のまちかわさき」推進協議会
- 問合せ：林敏後援会：☎044-951-6736
☎090-9238-3021



林敏さんの華麗な揚琴の音色を楽しもう!

‘わんりい’ 田井がチケットをお預かりしています。お会いできる機会のある方はこちらへのお申し込みもできます。

☎042-734-5100 (わんりい)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に‘わんりい’の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。